ふくしまを訪ねた文学者たち

白河の関跡

松尾芭蕉（まつお・ばしょう）
寛永二一～元禄七・一〇・一二。伊賀上野に生まれ、藤堂氏の近習となり、俳諧に志す。俳諧に高い芸術性を賦与し、蕉風を確立した。各地に旅して多くの名句と紀行文を残している。

正岡子規（まさおか・しき）
慶応三・九・一七～明治三五・九・一九。伊予松山生。本名常規。江戸以来の月並俳句を排して写実を主とする俳句革新と、古今調をしりぞけて万葉調を尊ぶ短歌革新の二大事業をなしとげ、また、小説界でも漱石や鈴木三重吉を生んだ功績がある。

宮沢賢治（みやざわ・けんじ）
明治二九・八・一～昭和八・九・二一、岩手県花巻生。詩人・童話作家、農業改良指導者。銀河空間にまで広がるイメージの世界と法華経信仰から来る深い人間愛は人々を魅了して止まない。

1 おくのほそ道　松尾芭蕉

紀行　元禄一五年（一七〇二）

元禄二年（一六八九）三月二七日、門人曽良を伴って江戸を発ち、奥羽・北陸を経て大垣に至る二四〇〇キロ、七ヶ月に及ぶ旅に出た芭蕉は、四月末に本県にさしかかる。

まず白河の関を訪ね、風の音に能因法師が訪れた古関への思いを詠んでいる。

西か東かまづ早苗にも風の音

須賀川では相楽等躬のもとに七泊。そこに集まる地元の連衆と席をもつ。また等躬の屋敷の一偶に隠棲する僧可伸に関心を寄せる。

風流のはじめや奥の田植歌

世の人の見付けぬ花や軒の栗

須賀川を発ち、乙字ヶ滝を見物し郡山に入った芭蕉は、万葉集にも詠まれた歌枕・安積山、そして安積沼や花かつみを尋ねて歩く。

二本松の黒塚を経て福島に入り、河原左大臣源融の歌にある文知摺石を見に行く。

早苗とる手もとや昔しのぶ摺

さらに医王寺、大鳥城を訪れ、義経に忠誠を尽くした佐藤継信、忠信兄弟をしのび感涙を流している。

笈も大刀も五月に飾れ紙のぼり

飯坂温泉に泊り、雨もり、蚤蚊に責められて眠られず、持病さえおこった芭蕉は、馬の助けをかりて桑折から伊達の大木戸を越え、「道路に死なん、是天の命なり」と、気力をふり絞ってさらに旅を続ける。

注

＊1都をば霞とともに立ちしかど秋風ぞ吹く白河の関（後拾遺集）
平安時代に能因は白河の関を訪れ、右の歌を残している。

＊2須賀川には、可伸庵跡や十念寺に芭蕉の句碑がある。また、芭蕉記念館も建てられている。

＊3安積香山影さえ見ゆる山の井の浅き心をわが思はなくに（万葉集巻一六）
「古今和歌集」で紀貫之は、この歌はわが国の歌の父母だと言ってから「安積山の道」は「和歌の道」を指すようになった。

＊4みちのくのしのぶもぢずり誰ゆゑに乱れ初めにし我ならなくに（古今集）文知摺石は福島市山口の文知摺観音にあり、この石で布を染色したなどの言い伝えがある。

2 はて知らずの記　正岡子規

紀行　明治二六年（一八九三）

子規の明治二六年七月一九日から八月二〇日までの奥羽旅行記で、県内は白河、須賀川、郡山、本宮、杉田、黒塚（二本松）、満福寺、福島などについての記事がある。

福島では、信夫文知摺（「涼しさの昔をかたれ葱摺」）飯坂温泉（「夕立や人声こもる温泉の煙」）を訪れている。近くの医王寺には関心を示しながら、体調が悪く、訪問を断念して、桑折に出ている。

この後、子規は仙台、松島、大石田、最上川、酒田、象潟、秋田、黒沢尻、水沢と行き、そこから汽車に乗り、上野に着いている。

4 宮沢賢治歌集　宮沢賢治

短歌　大正五年（一九一六）

宮沢賢治の歌のなかに、大正五年七月以降の作として、「福島」という題がつけられた次の歌がある。

ただしばし群れとはなれて阿武隈の岸にきたればこほろぎなけり

水銀のあぶくま河にこのひたひぬらさんとしてひとり来りぬ

しのぶやまはなれて行ける汽鑵車のゆげのうちにてうちゆらぐなり

この頃、賢治は盛岡高等農林学校の二年生で、七月から十月の間、東京でのドイツ語夏季講習会、同級生との長瀞・三峰地方旅行、学校の見学会（仙台・福島経由、山形）などに出かけているから、そのいずれかの途中福島に立ち寄ったときの作であろう。これらには若き賢治の悩みと孤独感が色濃くあらわれている。

斎藤茂吉（さいとう・もきち）
明治一五・五・一四～昭和二八・二・二五、山形県生。医者であり歌人。『つゆじも』『童馬漫語』等の作品がある。

泉　鏡花（いずみ・きょうか）
明治六・一一・四～昭和一四・九・七、石川県生、本名鏡太郎。金沢出身。小説家。『婦系図』『歌行燈』などの傑作を残した。

幸田露伴（こうだ・ろはん）
慶応三・七・二三～昭和二二・七・三〇、江戸生。明治二〇年代の四大作家（鷗外・紅葉・逍遥）の一人。浜通りを南から北へ旅したことを記した紀行文『うつし糸日記』（明30）もある。また史伝『蒲生氏郷』（大14）にも福島のことが記されている。

若山牧水（わかやま・ぼくすい）
明治一八・八・二四～昭和三・九・一七、宮崎県生。明治四二年詩歌雑誌『創作』の編者となり、同年刊行の歌集『別離』により激賞される。生涯に約六千九百首の歌作をなし、十五冊の歌集を出した。

飯尾宗祇（いいお・そうぎ）
応永二八～文亀二・七・三〇、室町末期の連歌師、当時第一等の地位である宗匠となり、各地を旅行しながら連歌の普及につとめた。著名な『新撰菟玖波集』を猪苗代兼載の協力で編さんした。

5 あらたま

短歌　斎藤茂吉　大正一〇年（一九二一）

森鷗外の文章の「次第に璞から玉が出来るやうに、記憶の中に浄められて、周囲から浮き上がって、光の強い力の大きいものになってゐる」といったこと等を頭において、歌集に『あらたま』と名付けたと「あらたま編輯手記」で述べる。「璞」とは掘り出して、まだみがいていない玉を言う。作者には第一歌集『赤光』があり、これは第二歌集。歌論の「実相に観入して自然・自己一元の生を写す」写生説を深めた集、大正五年七月父の病気を見舞った帰途、瀬上に住む歌人門間春雄を訪問して吾妻山に登った。この集に収めた「故郷。瀬上。吾妻山」の連作はこの時のものである。

山こえて二夜ねむりし瀬上の合歓花のあはれをこの朝つげむ

霧こむる吾妻やまはらの硫黄湯に門間春雄とこもりゐにけり

6 飯坂ゆき・白羽箭

紀行・小説　泉　鏡花　大正一〇年（一九二一）明治三六（一九〇三）

『飯坂ゆき』は大正一〇年に飯坂温泉を訪ねた時の紀行文である。

『白羽箭』は、若い詩人・新三郎が会津若松を訪ね、古城・鶴が城を詩にしようとするが、なかなかできない。しかし女神摩利支天の加護によって作詩する力を回復するという筋である。文中には城跡はもちろん、野郎構、湯川がでてくる。明治三六年『文芸倶楽部』に発表、大正四年には単行本となった。鏡花文学特有の幻想性には乏しいが、明治の会津をよく描写している。

32 突貫紀行・遊行雑記

紀行　幸田露伴　明治二〇年（一八八七）明治三三年（一九〇〇）

明治二〇年八月二八日夕方、福島に到着した幸田露伴は東京へ帰る汽車に乗るために郡山まで歩いた。その途中本宮で休んだことが『突貫紀行』に記されているが、二本松、郡山間での作句「里遠しいざ露と寝んの草まくら」が露伴という号の由来となった。『遊行雑記』（明33）は、松川浦の地理、美しい地形、風情についての詳しい記述がある。

47 酒の歌

短歌　若山牧水　大正一五年（一九二六）

つばくらめちちと飛び交ひ阿武隈の岸の桃の花いま盛りなり

など、瀬上、飯坂、福島市街で詠んだ歌一三首を収めた歌集。

旅と酒と歌を愛した若山牧水は、大正五年と大正一五年とに福島市を訪れ宿泊している。

とくに大正一五年一一月には天野多津雄を頼り三春町も訪れ、山田屋旅館に泊まっている。旅館中庭には

時をおき老樹のしづく落つるごと静けき酒は朝にこそあれ

の歌碑がある。同旅館には「牧水の間」も残っている。

乙字ヶ滝

文知摺石

49 白河紀行

紀行　飯尾宗祇　応仁二年（一四六八）

関東に下っていた連歌師の宗祇が、白河の関を訪ねたときの短い紀行文。白河城主の結城直朝の招きによる。「関にいたりては中々言の葉にのべがたし。只二所明神のかみさびたるに、一方はいかにもきらびやかに、社頭神殿も神々しく侍るに、今一かたはふりはて、苔を軒端とし紅葉をゐ垣として、正木のかづらゆふかけわたすに……」とあるのを見ると、この「二所の明神」は現在の白坂の関明神の様子を思わせる。旗宿を訪ねたのか白坂を訪ねたのかは不明である。巻末の連歌の発句には「袖にみな時雨をせきの山路かな宗祇」とある。宗祇は芭蕉も尊敬した人で、この宗祇の白河紀行は芭蕉の『おくのほそ道』の旅の先がけとして芭蕉の胸中にあったであろう。なお白河市内には「宗祇戻し」があって、芭蕉もこれを見ている。

医王寺

西山宗因（にしやま・そういん）
慶長一〇～天和二・三・二八、江戸初期、談林派の創始者である。はじめは連歌所宗匠となったが、のち自由活達な談林俳諧の新風をおこした。宗因を迎えた風虎は俳諧を好み、宗因や北村季吟らと交わりが深く、その編著『桜川』は今に残る初期俳諧集として知られる。

大町桂月（おおまち・けいげつ）
明治二・一・二四～大正一四・六・一〇、高知市生。福島を記している紀行文には、他に『常磐の山水』（明40）、『白河の七日』『白河の関』（共に大7）、『会津の山水』（大10）などがある。

結城哀草果（ゆうき・あいそうか）
明治二六・一〇・二二～昭和四九・六・二九、山形県生。安達太良山を詠んだ歌に『山塊』（昭24～29）がある。

田山花袋（たやま・かたい）
明治四・一二・一三～昭和五・五・一三、群馬県生。本名録弥。自然主義小説家『蒲団』『田舎教師』等の作品がある。

大岡昇平（おおおか・しょうへい）
明治四二・三・六～昭和六三・一二・二四、東京生。小説家。『俘虜記』（昭27）、『野火』（同）、『レイテ戦記』（昭46）などの著作がある。

長塚　節（ながつか・たかし）
明治一二・四・三～大正四・二・八、茨城県生。小説『土』（明45）を刊行。短歌『鍼の如く』（大3～4）の歌人として知られる。二本松出身の歌人で医師の久保猛之吉博士に結核の治療を受けた。

ノーマン・メイラー
大正二二・一・三一～、アメリカ生。一貫して社会批判的な作品を発表、『鹿の園』『夜の軍隊』等。

50 陸奥松島一見記　西山宗因

紀　行　寛文二年（一六六二）

この紀行は俳諧師の西山宗因が寛文二年（一六六二）に行った松島見物の短い旅行記である。京都を出て、七月末、勿来の関からいわき市平に入り、城主の内藤義泰（俳号風虎）の接待を受けたのち、風虎と共に八月半ば平を出発、相馬の中村を経て、仙台から松島に至った。天下の名勝を賞美したあと、帰りは福島、二本松、三春からいわきに出、しばらく滞在し、九月末出発して、白河の関を通って江戸へ向かった。

いわきでは、勿来の関、野田の玉川などの名所を案内され、また城主風虎の別荘地の景勝を楽しんだ。もちろん、その間に俳諧の席にも出たであろう。

52 阿武隈川水源の仙境／甲子温泉行

大町桂月／結城哀草果

紀　行　大正七年（一九一八）／昭和十一年（一九三六）

桂月が奥州に名高き阿武隈の水源を求めて、家族で一夏二〇日間余りを甲子温泉に過ごした紀行文。甲子八八滝や巨岩の紹介などが臨場感にあふれている。

『甲子温泉行』は同じく白河を紹介しながら、滞留浴泉した甲子温泉のすばらしさにふれた紀行文。甲子温泉が、阿武隈川の源流が甲子山の麓で二つに分れている奥に湧きでる温泉だと地理的に紹介されたあと、甲子山も白河楽翁公（松平定信）の「白川へ到りて甲子の山見ざらんは孔子の門を過ぎて堂に入らざるがごとし」という言葉をひいて紹介されている。

○甲子高原

○母成峠

○小名浜港

53 棚倉百勝詠歌集・ある訪問　田山花袋

短歌　明治二六年（一八九三）大正七年（一九一八）

わが国自然主義文学の代表者である花袋は明治二六年、二二歳の時、亡き姉の夫である石井収（棚倉郡長）宅を訪れた。その時、町の名勝百を選んで歌を詠んだ。

いさましきこえとめくれは陸奥の黒駒多したなくらの里（棚倉馬市）

『ある訪問』は、以前棚倉を訪ねた際、神社の娘に婿入りするために見合いしたが、不調に終わったことを、二五年後再訪の地で思い出し、懐旧の情に浸るというもの。

66 保成峠・磐梯愁色　大岡昇平

随筆　昭和二八年（一九五三）昭和三一年（一九五六）

『南柯紀行』（明44）の著者大鳥圭介（明治元年、薩長土連合に石筵峠で敗北）への強い興味から母成峠へやって来た作者は、『保成峠』で圭介のことと母成の地理・歴史のこととを詳しく記している。他に河上徹太郎も圭介の調査でこの地を訪れ、随筆『中の澤温泉』（昭30）を書いている。

『磐梯愁色』（昭31、改題『檜原』）は、安達多良の尾山の一つ母成峠から檜原へ敗退していく大鳥圭介の眼に、果たして磐梯が愁色を帯びていたかどうかを確かめようとするもの。初出『文芸春秋』には略図があった。なおこの二つの随筆は歴史事実を記しているため作者は小説として分類している。

91 隣室の客・青草集　長塚　節

小説・短歌　明治四三年（一九一〇）明治三九年（一九〇六）

家事手伝いの女性と関係してしまった若い主人公が、母の指図で平潟の港の宿に移転させられるが、隣室の女性客が過去のことを思い出させるので、遂にその宿も出ていくという、繊細だが弱い心をもった青年を描いた小説。勿来の関、平・関田の浜・小名浜などの海岸が描写される。

未刊歌集『青草集』（全四三首）には、長塚節が明治三九年六月末に療養のため出かけた平潟港をはじめとして、平を中心とする浜通りを経て、同年八月中旬の白河に至るまでに詠まれた歌が収められている。

97 兵士たちの言葉　ノーマン・メイラー

小　説　昭和三四年（一九五九）

アメリカの反戦主義作家ノーマン・メイラーは、昭和二一年に進駐軍の炊事班長として、いわき市小名浜に居たことがある。「彼は海岸をもっと北へ行った、小さな港町に駐屯している部隊へ配属された……彼は、例のいまひとりの炊事兵と一緒の部屋で、何年このかたはじめて比較的ひっそりと生活することができた。港町は美しかった」。『ぼく自身のための広告』のなかに収められたこの短編小説は小名浜を舞台としたもの、彼の傑作『裸者と死者』にもそこでの体験が投影して重要な影響を与えているという。「小名浜の美しい海岸の印象は忘れられない」と彼は今も懐かしむ。

外国人が福島県を描いた作品としては他に、イサベラ・バード『日本奥地紀行』、ドナルド・キーン『日本細見』などがある。